「真理の御霊に導かれて」　　ヨハネの手紙第一　２：１９－29

序論

先週は、安藤和子先生が創世記からみことばを語ってくださいました。神様は始めに素晴らしい世界をお造りになられたこと、人の歴史はその神様の大きな祝福の中で始まったことを教えてくださいました。

また午後からの聖書セミナーでは、やはり創世記から、罪の問題について語ってくださいました。神さまの言葉に従わなかったことによって、私たちの人間の歴史に「罪」という問題が入ってきました。そして、人はその罪のゆえに、神さまとの交わりという祝福を失ってしまいました。神様との正しい関係を失った人間は、お互いの間にも不信感を抱くようになり、「罪」による悲惨な出来事が人々の間で起こるようになってしましました。

そして、残念なことに、現代に生きる私たちも、その罪の影響のもとに生きています。

ただ、感謝なことに、神様はそれでよしとはなさいませんでした。私たちが罪の下に閉じ込められたまま終わってしまうことをよしとはされなかったのです。そのために、神様にしかできない不思議な方法で、私たちに救いの道をひらいてくださいました。それが聖書の伝えている良き知らせ＝福音です。

今日は最後のところで、この福音についても語りたいと考えています。しかし、先ずは今朝のみことばの中で触れられている 2 つの存在について見てゆきたいと思います。それはどちらも、目では見えない霊的な存在です。

ふたつの霊的存在①（反キリストの霊）

その一つ目は、「反キリスト」です。18 節を見てください。「幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。」とヨハネが述べているように、ヨハネの時代に多くの反キリストが現れました。そして反キリストの現れをもって、「今が終わりの時であると分かります。」とヨハネは続けています。反キリストが現れるということが、終りの時の徴（しるし）であると、みことばは言っています。

ヨハネが生きていた頃から、さらに 2000 年という時間が経過した今の時代は、その分だけ終わりに近づいているとも言えます。しかし、そういうふうに長い時間が経っているということ以上に、人々の心に「終りの時」を意識させるのは、その時代が醸し出す空気感です。人はだれに教えられるわけでもないのに、終末的な空気を感じ取って、「世も末だ」と言ったりします。時代の性質が、世の終わりの様相を示しているという意味においても、今の時代は終りの時が近づいていると感じさせます。

今朝の箇所でヨハネが「反キリスト」と呼んでいるのは、具体的にはある人々のことを指しています。次の 19 節では、彼らがもともと仲間であったけれども、自分たちのもとを離れて出て行ってしまったと記されています。ですから、ここでは「反キリスト」は特定の人物、つまり普通の人間をさしています。しかし、もう少し読み進めてゆきますと、ヨハネはその人たちの背後にいる霊的な存在について語りはじめます。たとえば４：３が挙げられます。「イエスを告白しない霊はみな、神からのものではありません。それは反キリストの霊です」。この御言葉に見る通り、「反キリストの霊」と呼ばれる霊的な存在が、人々の間に働いていました。そして終りの時代には、この「反キリストの霊」に惑わされた人が多く現れてくるのです。

私たちが生きている今は、どんな時代でしょうか？　現代は、本当に困難な時代です。世の中は全般的に、反聖書的な傾向が強くなっています。反キリストの霊が活発に働いているからです。聖書的な価値観が否定され、聖書に書かれていることが非科学的だといって退けられようとしています。先週学びました創造論と進化論の問題の他にも、性のアイデンティティのようなデリケートな問題があります。また、愛

とか自由の名のもとに結婚が尊ばれなくなっている悲しい現状を目の当たりにします。

日本では、そもそも聖書が何を語っているかについて教えられること自体が稀(まれ)なので、世の中が反聖書的な価値観へと傾いて行っているということがあまり認識されていません。しかし、キリスト教国とされていた欧米諸国では、むしろ公然と聖書に反する教えが世の中に広がりつつあり、伝統的な聖書の教えが標的にされていると聞きます。

どうして、そうなってしまったのでしょうか？それは、世の人々が「反キリストの霊」に従っているからです。人はなぜ、「反キリストの霊」に従ってしまうのでしょうか？それは、既にお話した通り、現代に生きる私たちも含めて人はみな、人類のはじめの罪の影響のもとにあるからです。罪の影響のもとにある私たちは、何でも自分の思い通りにしたいと欲しています。自分の目に良いと思うことをすることが正義であって、誰かほかの者の権威に従うのを嫌います。

聖書は人が最初に犯した罪についてなんと教えているでしょうか。それは、神様のことばに背くということでした。神への反抗は、神のことばに従わないという不服従から始まります。反キリストの霊は、神のことばを蔑（ないがし）ろにします。神のことばよりも、自分が良いと思うこと、自分の目に良いと見えることに従うようにと、人々に働きかけます。そして、やがて人々を聖書の教えに公然と反対する者へと仕立て上げていきます。それが反キリストの霊の常套手段です。

ヨハネは自分の生きた時代に、「多くの反キリストが現れている」と語りました。それと同じように、私たちも今、この現代社会で、反キリストの霊が活発に働き、多くの人々を惑わしているのを見、肌で感じます。神様の御心に適わないことがまかり通っている悲しい現状があります。今の時代もまた、反キリストの霊が働く、終りの時の様相を示しています。

ふたつの霊的存在②（聖霊＝キリストの御霊）

しかしです。たとえそのような暗闇の働きが活発になっているとしても、私たちは、決して狼狽(うろた)える必要はありません。私たちには、20節で語られている、もう一つ別の霊的存在がいてくださるからです。そのお方とは、真理の御霊です。私たちはこのお方を、聖霊と呼んだり、御霊と呼んだりしますが、どちらも同じお方のことを指しています。

20節をお読みしましょう。「あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。」「聖なる方からの注ぎの油」、これが「聖霊」です。聖書の中では、聖霊のことが、よく「油」に例えられます。なぜ、聖霊のことを「油」に例えるのかというと、それは、モーセの律法に記されたイスラエルの古い習慣に関係しています。

むかし、イスラエルの国には「油注ぎ」という習慣がありました。これは、「王」、「預言者」、「祭司」を任命されるときに、良い香りのする高価な香油を頭から掛け、祝福するという儀式です。それは、「王」、「預言者」、「祭司」が、神様によって任命された特別な働きであることをあらわす、聖なる義式です。油注ぎを受けた人は、神さまの特別な働きのために、特別に取り分けられた存在、すなわち「聖別された者」とされ、祝福を受けました。

そして興味深いことに、今では「救い主」という意味で使われている、メシアやキリストという言葉は、この「油注ぎ」に由来する言葉です。ヘブル語で「油注がれた者」を意味する「メシア」が、ギリシャ語に訳されたのが「キリスト」という言葉です。ヨハネは、「聖なる方からの注ぎの油」という表現を使っていますが、本当の意味で、聖なる神様から「油」を注がれたのは、「メシア」すなわち「油注がれた者」である「キリスト」、私たちの主イエス・キリストです。

私たちに与えられている「注ぎの油」とは何でしょうか。それは、かつてイスラエルが「王」「預言者」「祭司」を神の特別な働きに任命する際に注いて、祝福したように、私たちを聖なる神様のものとして特

別に取り分ける「聖別の油」、「祝福の油」としての聖霊です。聖霊は、イエス・キリストこそ神が油注がれたメシアであると信じる者に注がれる、「聖なる方からの注ぎの油」です。「聖なる方からの注ぎの油」が、私たちに注がれているのは、メシアであるイエス様を通してです。

このことをパウロはエペソ書で次のように述べています。「13 このキリストにあって、あなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞いてそれを信じたことにより、約束の証印を押されました。14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。」（エペソ１：１３－１４）　また、ローマ書では「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉のうちにではなく、御霊のうちにいるのです。もし、キリストの御霊を持っていない人がいれば、その人はキリストのものではありません。」（ローマ８：９）と教えています。ここでパウロが言っているように、聖霊は「キリストの御霊」でもあります。この世には、「反キリストの霊」に従う人もいますが、「キリストの御霊」である聖霊を与えらえて、神に従うようになった人々もいます。今朝のみことばで、ヨハネが問題にしているのは、この世の中に働いている「反キリストの霊」に従うのか、それとも真理の御霊である聖霊＝「キリストの霊」に従うのか、あなたはそのどちらに従うのかと云うことです。

聖霊によって真理を知っている（信仰）

この後ヨハネが語っていることを見てゆきましょう。20 節で、ヨハネは、「あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。」と言っていました。イエス・キリストを信じる私たちは、真理を知っている、これがヨハネの主張です。次の 21 節でも「21 私がこのように書いてきたのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからです。また、偽りはすべて、真理から出ていないからです」とヨハネは述べています。

クリスチャンにもいろいろな人がいます。察しの良い人もいれば、悪い人もいます。物事をよく知っている人もいれば、まだ何も知らない幼子のような人もいます。それでもヨハネは、キリスト者なら全員が真理を知っていると主張しています。

キリスト者なら全員が知っている真理とは一体どんな真理でしょうか？その真理とは、「イエスは主である」ということです。クリスチャンとは、まさに「イエスは主である」「イエスはキリストである」と告白し、この真理に立つ人のことです。だからすべてのクリスチャンは、「イエスは主である」ことを知っています。そして、Ｉコリント１２：３で、「聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません。」とパウロが教えているように、この真理は、世の知恵によってではなく、聖霊によって教えられる真理です。

だから、27 節でも「27 あなたがたのうちには、御子から受けた注ぎの油がとどまっているので、だれかに教えてもらう必要はありません。その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてくれます」と説明されています。

そしてそれは、理屈ではなく、信仰によって受け取る「真理」です。キリスト者は、聖霊によって教えられて、信仰によって「イエスは主」ですという真理を受け取っています。真理とか難しいことを言われても私はあまりピンとこないという人ばいても、クリスチャンであれば全員が信仰によって知っている真理、それが「イエスは主である」と言うことです。

反キリストはイエスが主であることを否定する

それとは反対に、反キリストは、「イエスが主である」ことを否定する者です。御霊が教える真理に立たずに、イエスがキリストであることを否定します。22 節 23 節をお読みします。

「22 偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否

定する者、それが反キリストです。23 だれでも御子を否定する者は御父を持たず、御子を告白する者は御父も持っているのです」

ヨハネの時代の反キリストが、具体的にどのような主張をしていたかは、正確には分かりませんが、その主張の本質的な所は「イエスがキリストである」ということ否定する点にあります。いつの時代でも、反キリストは「イエスがキリストである」ことを否定します。神のことばに従うよりも、自分の目に正しいと思うことに従う方がよいと思わせ、人々をキリストに逆らうものとし、神から引き離します。

人が何に従うかは、その人の人生の土台となる重要なことです。「イエスが主である」ということを否定するなら、聖書の言葉は「主のことば」でも「神のことば」でもなくなります。みことばに従う根拠が無くなってしまいます。そしてその人は、人生の確かな土台である、聖書の御言葉という拠り所を失い、神から離れていきます。

キリストのうちにとどまる

それ故、ヨハネははじめから聞いていた真理にとどまるようにと勧めています。「イエスが主である」という真理に留まることは、御子であるキリストと御父である神様のもとにとどまるということです。24 節をお読みします。「24 あなたがたは、初めから聞いていることを自分のうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いていることがとどまっているなら、あなたがたも御子と御父のうちにとどまります。25 これこそ、御子が私たちに約束してくださったもの、永遠のいのちです。」また、28 節にもこうあります。「28 さあ、子どもたち、キリストのうちにとどまりなさい。そうすれば、キリストが現れるとき、私たちは確信を持つことができ、来臨のときに御前で恥じることはありません。」

みことばは私たちに真理にとどまるように勧めています。世において反キリストの働きがどんなに活発になっても、真理の御霊に従って「イエスは主です」という信仰告白に立ち、キリストにとどまりましょう。御子と御父のもとにとどまることとは、「イエスは主である」という真理に立ち続けることに外なりません。そこに、全能の神様が私たちに約束してくださった全ての祝福、すなわち永遠のいのちがあります(25 節)。

福音

現代に生きる私たちも、残念ながら罪の影響のもとに生きていると、申し上げました。しかし、感謝なことに、主なる神様はそれでよしとはされませんでした。私たちが罪のもとに閉じ込められたまま終わってしまうことをよしとは思われなかったのです。

そして、神さまにしかできない不思議な方法で、私たちに救いの道を用意してくださったのです。私たちが自分ではどうすることもできなかった罪の問題を、神様の側で解決してくださいました。それがイエス・キリストの十字架です。

キリストによる救いの道は、ただ神があなたを愛しているから、あなたの目の前に差し出されています。そのことをあなたは信じますか？

今まで人生につらいことや悲しいことがいっぱいで、自分は神に愛されてはいない、そんな資格はないと思い込んでいる方はいないでしょうか。それは反キリストの霊による偽りの囁(ささや)きです。

神は愛です。そして神の愛は無条件に注がれる愛です。神に愛されることに、条件や資格は一切ありません。神はあなたを愛しておられます。それが神にとっての真実です。

ところが私たち人間は、その神の愛から迷い出てしまいました。そして、人を傷つけ、自分を傷つけ、神を悲しませながら歩んでいます。

ところが、主イエス・キリストは、そんなあなたのために十字架にかかり、あなたのために命を投げ出

してくださいました。それによってあなたに救いを与え、命を与えたいと今も願ってくださり、執り成し祈って下さるお方です。

その父なる神と、子なる神である御子イエス・キリストが、いつも私たちと共にいてくださる為に、いつも私たちに神の真理を教えるために、私たちのもとに遣わしてくださったのが、「聖霊」というお方です。

今の世の中は、目に見えない事柄を受け入れません、科学的に証明されていないことは、真理ではないと、人々は考えています。しかし聖書は、もっと深い真理があり、目に見えないことの中に私たちを豊かに活かすいのちがあることを教えてくれています。それは、決して、科学的な真理と矛盾したり、対立したりするものではありません。ただ、科学的な方法では扱いきれないもので、霊によって、信仰によって受け取るものであるというだけです。

神のなさることは不思議です。世界中の誰も、一人の人が死ぬことによって、すべての人の罪が赦されるとは考えもしませんでした。世界中の誰一人として、救い主として生まれた方が、罪人として十字架にかけられて死ぬことになるとは思っていませんでした。世界中の誰も、そのお方が、天から降って来られた神の御子であるとは想像もしていませんでした。世界中のだれ一人として、父なる神様が、ご自身の独り子を身代わりにするという仕方で、私たちへの愛を示してくださるとは思ってもいませんでした。

しかし、反キリストの霊に聞き従って、神を無視して生きている限り、人はこの驚くべき神の愛を悟ることができません。神のことばに自ら耳を塞いで、聞かないようにしているからです。

でも、もしあなたが神を求めはじめて、真理の御霊の声に耳を傾けるなら、神様はあなたのことをどれだけ愛しているかを示してくださいます。私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれるからです。（ローマ５：５）真理の御霊は、その神の愛が信頼できるものであることを示してくれ、イエス・キリストこそが、神が定められた私たちの救い主であるということを、心の深いところに教えてくださいます。心を頑なにして、それを拒んではいけません。神があなたのために、キリストの命という尊い犠牲を払ってまで差し出してくださっている「救い」を、今受け取りなさい。必要なことは、すべて神がなしてくださっているのだから、安心して真理の御霊を受け入れ、神のもとへ帰りなさい。神は、あなたを許し、キリストのゆえにあなたを受け入れてくださる。そして、あなたをかけがえのない神の子としてくださり、あなたに愛を注いでくださるお方なのです。これが聖書が私たちに伝えている神のメッセージです。私たちに与えられた良き知らせ＝「福音」です。

お祈りしましょう